

ドコズンドコ！ 小林〈5〉

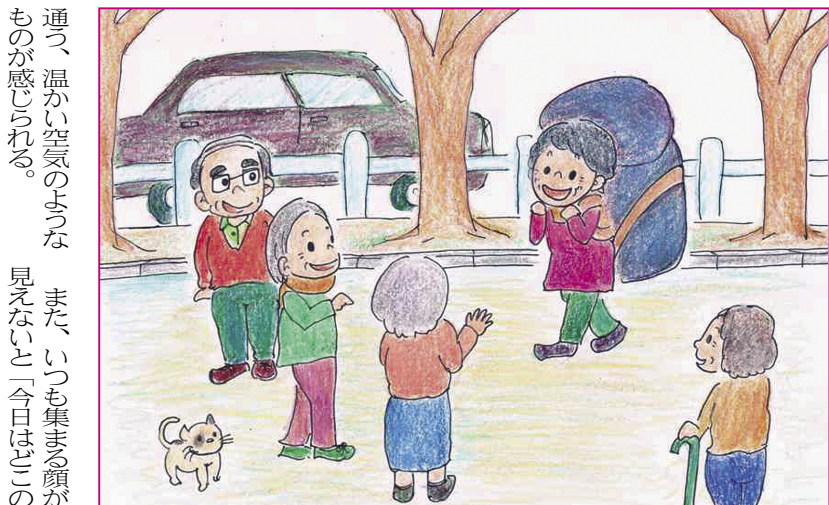
関野 唯 (イラストも)

乗るぞうだが「随分寂しくなった」とおばあちゃん。しかし、それでも今日も行商に向かう理由について、「やっぱりお客さん待たれば毎日行きたくなっちゃうよ」とおばあちゃんは語る。

おばあちゃんは成田線に揺られ、6時台には山手線に乗る。そこで近頃私立の小学校へ通う子どもたちと一緒になるのだぞうだ。子どもたちは大きな荷物を持っているおばあちゃんに興味津々。ある時隣の座席に置いていたカゴを下におろして座らせてあげたら、「このカゴの中には何が入っているの？」と尋ねられたぞうだ。「これはねえ、田舎の畑で採れた白菜とか、野菜が入ってるんだよ。それを東京の人に買ってもらうんだよ」

それからというもの、おばあちゃんは子どもたちに会ったたびに、子どもたちといろいろなお喋りをして池袋へ向かうようになった。

おばあちゃんが売場に行っているのは街中の歩道の一角である。8時前にそこに着くと、ちらほらお客さんが集まっている。そしてみんなで野菜を売る準備を一緒に手伝ってくれるという。こんなところにも、行商のおばあちゃんど、行商のお客さんとの間に



通う、温かい空気のようなものが感じられる。お客さんはおばあちゃん何十年の付き合いの人がおほとんどで、その多くはおばあちゃんと同世代の女性たちだ。そんな中に男性の姿もある。趣味で料理をするというその男性に、おばあちゃんは時々野菜の料理の仕方を尋ねられる。そうですと周りのお客さんが先

に「茹でて食べたら美味しいんだよ」とか、「これは酢で食べると美味しんだよ」といった感じで教えてあげているのだぞうだ。また、いつも集まる顔が見えないと「今日はどこの誰誰さん来ないね」といったような会話も生まれる。おばあちゃんの野菜を買いに来るお客さん達は、おばあちゃんを中心にみんな顔見知りなのだ。

ちなみに今の時期に人气的になっているのは、おばあちゃんご主人と一緒に前の晩に搗いてきたお餅である。混じりけのないその味はお客さんの間で冬には欠かせない味になっている。

(次回に続きます)

行商のおばあちゃんたちが行く先々で、温かい、ゆったいた時間流れる。

そこから一人、また一人と行商をする人の数は減ってゆき、今では始発列車に乗る行商人は小林駅で1人、布佐駅で2人になった。2番列車にはもう少し多く